

ANNUAL REPORT 2025

2025年度 事業報告書



みつかる。
つながる。
よくなっていく。

「共に生きる」連帯の回復を

2025年度、世界情勢が混迷を極める中で私たちは「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです(コリントの信徒への手紙1 12章26節)」を年間基本聖句に掲げました。分断が進む中であっても、他者の苦しみを自らのものとして受け止め、喜びを分かち合うつながりを強める働きに邁進した一年でした。

気候危機や紛争、貧困といった地球規模の課題が山積する中、世界のYMCAは共通の指針である「世界YMCA Vision2030」のもと、各地域で多角的な取り組みを展開しています。日本では6月、世界YMCAのカルロス・サンヴィー総主事とラズバン・サス氏を招聘し、各地で直接対話を重ねることで、2030年に向けてベクトルを合わせ、働きを加速させる決意を新たにしました。また、アジア・太平洋地域における平和の構築を目指し、韓国、中国、東南アジア各国のYMCAリーダーとの交流を深化させました。日中連絡委員会や日韓交流プログラムを通じた市民レベルの対話は、歴史的課題を超え、公正な世界を共に創り上げるための重要な基盤となっています。

戦後80年の節目を迎えた今年、広島を訪れた世界YMCAのリーダーたちは、2024年にノーベル平和賞を受賞した日本被団協(日本原水爆被害者団体協議会)の被爆者証言に耳を傾け、原爆慰霊碑へ献花を行いました。紛争下にあるパレスチナやウクライナの総主事も来日し、現地の苦境を分かち合う集会を全国で開催しました。4年目となったウクライナ避難者支援は、行政やNGOと協力して戸別訪問を続けて伴走支援を行うとともに、その声を社会に提言しています。国内においても、多文化共生や外国にルーツを持つ子どもたちへの支援の輪を広げ、誰もが尊厳を持って生きられる社会を目指しています。

社会協働事業として、民間企業や財団、行政と密接に連携し、児童養護施設の子どもたちへ提供してきたプログラミング学習支援は、延べ10,000人を超え、次世代の可能性を広げる機会となりました。シニア層への研修も開始し、世代を超えて誰もが社会に参画できる機会を創出しています。また、「全国YMCAオンライン研修プラットフォーム」を拡充し、高齢者福祉に携わるスタッフのための法定研修など、働きながらスキルアップできる環境を整備しました。

発災2年目となった能登半島地震・豪雨災害の被災地支援では、富山・滋賀YMCAと協力してリフレッシュキャンプを開催し、輪島市の子どもたちに笑顔と安らぎを届けることができました。

2025年度の歩みは、困難な状況下でこそ、他者と「共に苦しみ、共に喜ぶ」ことの尊さを再確認する日々でした。次年度も国内外のネットワークを最大限に活かし、公正で平和な世界の実現に向けて、一歩ずつ着実に前進してまいります。

最後に、日本YMCA同盟総主事が、田口努第15代総主事から、太田直宏第16代総主事に交代しましたこと、合わせてご報告申し上げます。

日本YMCA同盟 会長 **山本 俊正**
日本YMCA同盟 総主事(代表理事) **太田 直宏**

Contents

02	2025年度ハイライト
06	日本YMCA同盟協議会
08	ウクライナ避難者支援プロジェクト
10	能登半島地震／豪雨災害復興支援活動
11	ブランディング推進協力
12	ポジティブネット創造
13	学生YMCA
14	日本YMCA研究所
16	国際青少年センター YMCA東山荘
17	寄附・支援
20	委員会報告
23	全国YMCA総主事会議関連報告
27	現勢 関係団体
28	日本YMCA同盟組織
29	2026年度事業方針・計画
32	全国YMCA一覧

「世界YMCA Vision2030」へ 世界の仲間と手を携えて



日本YMCA同盟 2025年度年間基本聖句

「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ
一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」

コリントの信徒への手紙一 12章26節（新共同訳）

I 「世界YMCA Vision2030」の推進

気候危機や紛争、貧困など課題が山積する中で世界のYMCAは、2022年に採択された「世界YMCA Vision2030」を目指し、各地でそれぞれの取り組みを進めています。日本では、6月の同盟協議会に世界YMCAのカルロス・サンヴィー総主事とラズバン・サス氏を招き、Vision2030について直接語り合う時をもちました。ラズバン氏は、東京、大阪、横浜でも研修を実施。参加者からは「私たちの日々の活動が、世界のYMCAムーブメントを作っていると実感した」等の声が寄せられ、「Vision2030」の推進へ向かって思いを新たにする機会となりました。（6-7ページ）

両氏は協議会后、広島も訪問。2024年にノーベル平和賞を受賞した「日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）」の箕牧智之さんと佐久間邦彦さんから被爆者証言を聴き、原爆慰霊碑に献花しました。国際秩序がゆらぎ、核の脅威が増す中で迎えた戦後80年にYMCAは、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しむ」の基本聖句を胸に、世界の仲間と手を携えながら平和を希求して歩んでいます。



4つの活動領域——01 コミュニティー ウェルビーイング

Community Wellbeing

ポストコロナの時代にすべての人が、個人と集団のウェルビーイングを大切にしながら精神、知性、身体のパランスの取れた成長ができることを目指す。

少子化の影響を受けながらも全国のYMCAには、2025年度も計約7万人の青少年が参加し、アフタースクールや保育園、発達支援、ウエルネスや語学など、さまざまな事業活動の中で成長しています。

しかし、子どもを取り巻く社会環境は依然として厳しく、いじめや不登校児童数は過去最多を記録し、加えて貧困問題や外国にルーツのある子どもたちのケアなど、課題は尽きません。各事業担当者会では、スタッフの研修や情報共有を行って社会ニーズへの対応を進めているほか、いじめを考える「ピンクシャツデー」の開催、水難事故を予防する「ウォーターセーフティーキャンペーン」、障がいのある子どもたちを支援する「インターナショナル・チャリティーラン」など、全国での取り組みも継続。それぞれ数万人が参加するなど、コミュニティー・ウェルビーイングを目指して活動しています。



4つの活動領域——02 やりがいのある仕事と雇用環境の創造

Meaningful Work

すべての若者が価値のある有意義な仕事に従事し持続可能な生活を築けるよう、公正かつ公平な教育、雇用、トレーニングの機会を創出し提供していく。

2024年にスタートした「全国YMCAオンライン研修プラットフォーム」は、研修科目を着々と増やし、登録者は2,250人となりました。高齢者事業に携わるスタッフに欠かせない「法定研修」も受講できるようになるなど、働きながらステップアップできる機会を提供しています。

2025年3月に開始した「アルムナイ制度」は、4月から毎月、登録者にメルマガを配信。全国YMCAの近況や求人情報を届け、退職者・卒業生とのつながりを広げています。

世界各地のYMCAがIT教育など職業訓練に力を入れる中、日本のYMCAも企業とタイアップし、児童養護施設の子どもたちにプログラミング学習の機会を提供しています。2019年の開始以来、その数は延べ10,000人を越えました。今年はさらにシニア層を対象とした研修も行い、IT格差によって社会参画の機会が失われないよう、力を入れています。



Sustainable Planet

4つの活動領域——03 持続可能な地球のために

気候変動に対する若者の高い危機意識と積極的な発言から、若者主導による持続可能な地球のための解決策を推進し、気候変動に取り組む運動体になることを目指す。

酷暑、豪雨など激しさを増す異常気象は、日常生活に大きな影響を及ぼしています。さらに将来への不安として、ユース世代のメンタルにも影響しているといわれており、世界のYMCAにとって喫緊の課題となっています。

国内各地のYMCAは次々と「再生可能エネルギー」への切り替えを進め、リサイクルなど環境教育への取り組みも行っています。同盟は、気候危機を専門とするNGOと協働し、機関紙『The YMCA』やメルマガで情報の発信を続けたほか、ブランドグッズの見直しを行い、竹製の箸やオーガニック素材のハンカチなどを提供しました。

いち早く「再エネ」に切り替えたYMCA東山荘は、2025年もCO₂排出ゼロ施設として運営。災害時の蓄電池の設置、井戸水の活用、プラスチック製アメニティの利用削減など、工夫を重ねています。



Just World

4つの活動領域——04 公正な世界の実現のために

正義、平和、公正を求め、すべての人の人権を守ろうと努める若者やコミュニティと共に歩む。組織的な差別、不公平、不正などあらゆる種類の人種差別の課題においてグローバルな発信者となることを目指す。

4年目となったウクライナへの軍事侵攻。人道危機が極まるパレスチナ。さらに2月末にはアメリカとイスラエルがイランを攻撃するなど、世界がむき出しの暴力にさらされる中、YMCAは引き続きウクライナ避難者への支援活動を行ったほか（8ページ）、パレスチナに関わるNGOとともにキャンペーンを実施。イランへの軍事攻撃を行ったアメリカとイスラエルには抗議文を发出するなど、平和を取り戻そうと力を尽くしています。

国内でも排外主義的政党が台頭し、在日外国人への攻撃が過熱するなど、不穏な空気が強まっていますが、YMCAに連なるユースたちは、「学生YMCA日韓交流プログラム」や「広島YMCAユース・ピース・セミナー」などを継続し、各国の仲間と共に平和を考え、交流の輪を広げています。各地のYMCAでも外国にルーツのある子どもたちへの支援活動が徐々に増えるなど、公正な世界を目指す取り組みが進められています。



II 全国のYMCA運動の連結ピンとしての同盟機能の維持に努める

同盟は、総主事会議をはじめ各事業担当者会等と連携し、全国YMCAの財政再建や事業強化、将来構想の推進を担うとともに、特にスタッフレスのYMCAほか困難な状況にあるYMCAには個別の伴走支援も行っています。2025年度は、北海道YMCAの会計事務をサポートしたほか、金沢YMCAの法人種別変更手続き等、各種の運営支援も行いました。学生YMCAの活動や組織運営への支援も継続しています。

全国YMCAの代表機能として、世界YMCAやアジア・太平洋YMCA同盟はじめ各国YMCAとの関わりも強めているほか、日本キリスト教協議会（NCC）や全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）など関係団体の役員も担うなど、「連結ピン」としてYMCAの働きを内外につなげています。

能登半島地震／豪雨災害の支援活動においては、富山YMCA・滋賀YMCAと共に2度のリフレッシュキャンプを開催。輪島市の小中学生約50人が参加しました。

III 同盟事務局とYMCA東山荘の運営健全化を目指す

社会協働事業として、アマゾンジャパンやピーナッツ財団、東京都等と連携し、貧困、格差、多文化共生等の今日的課題の解決に向けた活動を続けています。

今夏110周年を迎えたYMCA東山荘は、110周年誌を編纂。100周年以降の10年間、コロナ禍やナラ枯れを乗り越え、多くの人に支えられてきた歩みを振り返る時となりました。少子化の影響で毎年利用くださる学校の生徒数が減少するなど、利用者数は伸び悩みましたが、地域住民の利用は増加、他団体と協働でフードバンクを実施したり、海外にルーツのある子どもたちにプログラムを提供するなど、地域ニーズに応える活動を続けています。

2024年度の6号館改修に続けて5号館の全面リニューアルを行い、内装も外装も刷新しました。6号館とも色調を合わせたことによって付近一帯の景観が変わり、明るく、使いやすくなりました。

日本YMCA同盟協議会

「分断の世界の中で、みつかる。つながる。よくなっていく。～ To Create a Just World ～」



2025年度の「日本YMCA同盟協議会」は6月21日～22日、「分断の世界の中で、みつかる。つながる。よくなっていく。～ To Create a Just World ～」をテーマにYMCA東山荘で行われ、約140人が参加。ウクライナ、ガザをはじめ各地に戦禍が拡がる中で迎えた戦後80年の節目に、世界YMCAのカルロス・サンヴィー総主事とラズバン・サス氏を招いて開催しました。

2日間の学びをととして参加者は、平和への思いを新たに、今後も世界YMCA Vision2030の実現に向けて世界との連携を強めながら、地域社会のニーズに叶う活動を展開していくことを確認。「YMCAという、世界のファミリーの一員だとあらためて実感した」「日々のYMCAの活動が、世界のYMCAの働きとつながっている。世界のムーブメントの一つを作っていると感じた」などの声が寄せられました。



左) カルロス総主事は「YMCAは分断された世界をつなげていく存在でなければならない。出会った人が癒しのエネルギーを感じられるように。痛みを共有し、思いやりをもって支え合うのがYMCAだ」と力強く語り、会場は熱気に包まれました。

右上) 協議会2日目には、世界YMCAのラズバン氏による「Vision2030」のワークショップを実施。このビジョンが、現代社会におけるさまざまな危機を乗り越えるためにいかに有効かを説き、一人ひとりの参画を呼びかけました。

右下) 会場には戦後80年を覚え、ジョー・オダネル氏による原爆投下直後の写真を展示。学生YMCAが主催した朝の礼拝も「平和」をテーマに行われました。

戦後80年に、広島を訪問

会の前後にカルロス総主事とラズバン氏は、「全国YMCA総主事会議」に登壇したほか、東京、横浜、大阪、広島YMCAを訪問。特に広島では、広島平和記念資料館を見学し、2024年ノーベル平和賞を受賞した「日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）」の箕牧智之さんと佐久間邦彦さんから被爆証言を聴きました。

原爆の脅威を目の当たりにしたカルロス総主事は、追悼の意をこめて原爆慰霊碑に献花するとともに、その苦しみや憎しみを越えて平和を訴えてきた被爆者たちに敬意を表され、「日本の皆さんは、調和や平和を大切にしている。宗教の対立もない。ぜひその声をもっと世界に向けて発信し、世界をリードしてほしい」と語りました。

帰国後8月6日には自身のSNSで「二度と繰り返してはならない」と投稿。「それは、政治など、あらゆる言い訳を越えて、私たちの責任である」と世界に向けて呼びかけました。



写真左から、田口努日本YMCA同盟総主事、佐久間邦彦氏、カルロス・サンヴィー世界YMCA総主事、ラズバン・サス氏、箕牧智之氏、家守治司広島YMCA総主事

パレスチナの平和を求めて



パレスチナで長く活動をしている東エルサレムYMCAのピーター・ナシル総主事が6月末、大阪で開催された「YMCA World Urban Network（世界YMCA大都市会議）」のために来日。東京、横浜のYMCAも訪ねたほか、広島では原爆資料

館を見学し、被団協理事長とも対談しました。東京では7月7日、日本YMCA同盟と日本YWCAの共催で講演会「今、パレスチナで何が起きているのか」を開催（会場：東京YWCA）。ヨルダン川西岸でもイスラエルの入植者たちにより苛烈な暴力がふるわれている実態を報告するとともに、東エルサレムYMCAが行っている、被害者へのトラウマケアやリハビリテーション、就業支援等について紹介。「パレスチナのことを忘れないでいて

ほしい」と訴えました。

また、ガザへの攻撃から2年目となった10月に同盟は、国内12のNGOと共にキャンドルアクションを実施。東京タワーのふもと増上寺に250人が集まりました。各団体は、支援活動を通じて見聞きした現地の凄惨な実態を共有するとともに、NGO共同声明「停戦を、食料を、今すぐに」を発出。「人為的に発生させている飢饉、強制的な移住、民間施設の破壊は、戦争犯罪です」と訴えました。



ウクライナ避難者支援プロジェクト

ロシアによる軍事侵攻から4年、いまだ停戦の道筋が困難を極める中、日本には現在1,965人のウクライナ避難者が生活しており（2026年3月末時点）、いまなお新たな来日も絶えません。

YMCAはこれまで世界各地で避難者支援を行い、日本では1,814人の支援、来日渡航から生活開始・生活のあらゆる困りごとへの対応・自立に向けた伴走まで行っています。今年は多くの避難者の生活基盤である財政支援が終了し、さまざまな課題を抱えながら自立を迫られる中、定住か帰国か揺れ動く避難者一人ひとりに寄り添い、生活・就労支援、子どもの進学サポート、日本語学習相談、QOL（生活／人生の質）向上や帰国支援など、引き続き多種多様な活動を展開しました。

1. 「東京都ウクライナ避難民 マッチング支援事業」

約660人の避難民が集中する都内では、2022年7月に東京都および東京都つながり創生財団と協定を締結して開始した「東京都ウクライナ避難民マッチング支援事業（ポポートヌイク・トーキョー）」を、2025年度も継続して実施しました。都内の避難者宅訪問や電話、SNS等を通じた相談対応を行い、各種現状調査を実施、避難者の現状やニーズを把握し必要な支援へとつなげるとともに、避難者のニーズを広く社会に発信する政策提言活動も行いました。

○訪問・相談対応：938件（避難民自宅訪問件数126件含む）

○定例会実施：隔週1回、東京都ほか関係団体と会合をもち、調査結果や支援内容、課題などを報告・相談

○生活オリエンテーション：8回 日本で暮らすための基本的な情報の提供、個別案件への対応

○マッチング支援：664件（2025年4月～2026年3月）



2. イベント、交流の機会提供

- ①定例事業：ウクライナ文庫（常設）約600冊の蔵書貸出
- ②東京都や各自治体主催のイベントへの協力：FC東京サッカー観戦、世界陸上招待、地域生活サロン など
- ③Ukraine Cafe HIMAWARI (YMCA 主催事業)：
 - 実施回数：6回
 - 参加人数：約120名
 - 実施内容：避難者とその家族を対象に、多言語での生活相談や教育・就業支援、ウクライナ語の本を取りそろえた常設図書館『ウクライナ文庫』の運営、避難者・支援者のリフレッシュを目的とした各種イベントの実施、避難者主導の事業・イベント実施支援など
 - 常設 図書館「ウクライナ文庫」（遠隔地含む）、衣料品・生活用品提供コーナー
 - 避難者就労支援企画：避難者向けオンラインIT研修コース（8週間）2回
 - 避難者・支援者リフレッシュ企画
 - ▷夏休み宿題サポート（日本YMCA同盟事務所）
 - ▷クリスマス人形劇・パーティ（東京YMCA）
 - 学び直しの日本語サロン（個別・竹ノ塚駅前会議室）（YMCA・NPO法人メタノイア協働事業）
 - 避難者主導の事業・イベント実施支援（YMCA事務所）：プレイバックシアターグループ（20回）など

相談分類	件数	主な支援
物資	126	生活用品（自転車、衣料品、生活家電など）、学用品（文具など）ほか
日本語	64	多様なニーズに応じた日本語教育（就労、オンライン、地域、検定、中高年やり直しなど）
就業	83	キャリアカウンセリング、ハローワーク同行、フルタイム移行支援、就業先対応
手続き	93	補完的保護・定住支援プログラム、帰国支援、都営住宅延長、各種行政手続き ほか
財政	102	生活困窮・生活保護相談、財政支援策終了に伴う相談対応
教育	55	受験・進学対応（説明会同行など）、入学・卒業準備、言語支援、学校との相談対応 ほか
医療・メンタル	71	体調・メンタル不調者、発病・持病悪化、ケガ・インフルエンザ・熱中症などの対応
生活・やりがい	33	趣味・サークル活動支援、イベント出展・協力、生きがいづくり
その他	37	帰国・移住、引越し、再避難、家族呼び寄せ対応、空き家情報、法律相談 ほか

3. 協力者や専門家(有識者)との協力

大学教員(大森佐和氏:早稲田大学教授)、YMCA国際協力委員、難民支援に関わる団体・有識者らと意見交換を行い、避難者へのアンケートの実施と分析、公共政策の視点からの政策提言、諸外国のウクライナ避難者の動向等情報提供等を行いました。長期化する避難生活において経済的自立に向けた重点課題の整理やそのプロセスは、日本の難民施策、多文化共生施策にも関わる重要なテーマです。

4. 政策提言活動(フォーラム開催、報告会の実施等)

- ①特別企画『戦禍を逃れて四年 ウクライナ避難者が自ら語る「いま」、「これから」』フォーラム開催(日本YMCA同盟主催):2026年2月21日実施、避難者・有識者・メディア等112人が参加
- ②『ウクライナ避難民支援連携フォーラム』開催(東京都主催):2026年3月18日
- ③メディアへの対応:
本事業について、以下のメディアへの取材協力をを行い、放送・掲載されました。
●NHK、NHKラジオ、日本テレビ、テレビ朝日、テレビ東京、毎日新聞、朝日新聞、読売新聞、産経新聞、共同通信など
- ④講義・講演・研修の実施:
大学・各YMCA・教会・NGO団体等 14回約3600名

5. ウクライナYMCA年次総会出席及び活動視察

10月25～26日、ウクライナ西部の都市テルノピルにて、ウクライナYMCAの年次総会が行われました。ウクライナYMCAは首都キーウに全国事務局と33の都市に活動拠点が

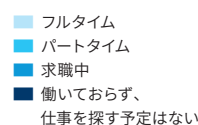
ありますが、ロシアの占領下にあるため活動を休止せざるを得ない地域もあり、今回は17拠点の出席となりました。日本は長年にわたる東京YMCAとのパートナーシップや、軍事侵攻以降のウクライナ避難者の渡航や生活支援の関わりから出席の呼びかけがあり、日本YMCA同盟スタッフが現地へ赴きました。ヨーロッパYMCA同盟ほか、スウェーデン、フィンランド、ドイツ、デンマークからも出席があり、グローバルなYMCAファミリーによる国際的連帯が強く示される機会となりました。合わせてリヴィウ、テルノピル、ルーツクにあるYMCAを訪れ、戦禍におけるYMCA活動を視察しました。

アンケート調査

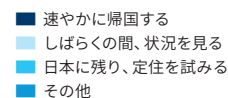
1月実施のYMCA避難者現状調査結果から

就労状況は改善していますが、大半がパートタイムで収入も5～10万円程度。日本語能力や資格の壁で自立にはまだ遠い状態です。一方、戦争が終結しても、9割以上が日本での長期滞在や定住を希望しています。

Q.現在の就労状況は?



Q.戦争が終了した場合、どのような選択を希望しますか?



戸別訪問の様子



特別企画「避難者が自ら語る『いま』『これから』」2/21



クリスマス人形劇・パーティ

能登半島地震／豪雨災害 復興支援活動

2024年1月に発生した能登半島地震、同年9月の豪雨災害。「二重災害」と言われる甚大な被害を受けた能登半島に、YMCAは発災直後から避難所支援や泥かきボランティアの派遣、子どもたちのリフレッシュキャンプなどを行ってきました。

2025年度は昨年に引き続き、子どもたちの心身のリフレッシュと地域を越えた交流を目的とした宿泊キャンプを、輪島市の小中高生を対象に行いました。運営は、主管となる滋賀YMCA、富山YMCAに加え、横浜YMCA、盛岡YMCAのボランティアと共に実施。永年にわたり培ってきたキャンプやレクリエーション指導の経験を活かし、大自然の中で伸び伸びと楽しい体験を提供することで、子どもたちの心のケアと成長を応援しました。



リフレッシュキャンプ

夏期キャンプ

「立山フレンドシップキャンプ」

日にち：8月18日～20日

会場：国立立山青少年自然の家（富山県）

参加者：31人

輪島市小中学生20人

滋賀・富山YMCAの小中学生11人

概要：生き物探索、軽登山、キャンプファイアほか
各種レクリエーション



冬期キャンプ

「立山スノーブリッジスキーキャンプ」

日にち：1月10日～12日

会場：国立立山青少年自然の家（富山県）

参加者：54人

輪島市小中学生32人

滋賀・富山YMCAの小中学生22人

概要：スキー指導のほか、雪遊び、室内レクなど

保護者の声より

輪島市は震災後、他県へ転出する家庭も多く、子どもの数が半減しました。遊び場だった運動場は仮設住宅になり、家でゲームをすることが増えました。工事車両が多くて自転車も危ないため、行動範囲も限られています。大人は家業の復興で忙しく、家族旅行などできませんから、YMCAのキャンプはありがたいです。娘はこれまで3回参加させていただきましたが、いつも「また行きたい」と言って帰ってきます。今回も、新しくできたお友だちのことなど、お土産話を聞かせてくれました。2年が経ち、報道も減りましたが、私たちは町の復興に向けて頑張っています。時おり声をかけていただくと嬉しいです。(小学4年生の保護者)

我が家は地震で全壊してしまいました。家族は全員助かりましたが、子どもは精神的ショックが大きくて、特に下の子は家でも一人でいられないなど、不安定な状態が続きました。震災から2年が経ち、少し落ち着いてきたので今回キャンプに参加しました。スキーもお泊りも生まれて初めてでしたから、本当に大冒険でしたが、帰ってくるなり「楽しかった!」と。不安が自信になった様子で私も嬉しくなりました。いつもは控えめな上の子も「また行きたい」と懇願するので、今週末に家族でスキーに行ってみることにしました。

この2年間、怖かったこと、寂しかったこと、たくさんの方がいましたが、楽しい経験や新しい出会いの中で、元気に育ってほしいと思います。(小学2年生、4年生の保護者)

ブランディング推進協力

会議体の運営

全国YMCA総主事会議を中心に20余りの事業担当者会と連携して全国協働、ブランディングを推進しています。コロナ禍を経て、対面開催の重要性が改めて見直され、総主事会議をはじめとした各事業担当者会の多くで対面形式での研修会や担当者会が開催されました。一方で目的や状況によってオンラインも活用し、役員会、意見交換会、打合せ等も多く開催され、積極的な全国交流、情報共有が行われました。2025年度には多くの事業担当者会で新たな会長が選任され、3年目を迎えた「会長連絡会議」でもより活発な協議が行われました。(総主事会議および各事業担当者会の報告は、23～25ページに記載)

ユニフォーム・ノベルティー

ユニフォームやノベルティーグッズの制作・管理についても、全国YMCAと協力・相談しながら、製品の改良等に取り組みました。今年度はブランドユニフォームパートナーのミズノ株式会社とプロパー商品に関する契約を締結。フリースやスウェットなど新たな冬季用ウェアを提供しました。

ノベルティーグッズは、全国YMCAにアンケートをとってニーズ調査をした上で、商品の開発やデザインの改訂をしました。竹の繊維を使ったマグカップやリサイクルコットンのトートバッグなど、「Sustainable Planet(持続可能な地球のために)」のビジョンに基づいたエコグッズを増やし、全25種類、合計20,000点余を提供しました。

ブランディング推進、広報活動

YMCAブランドが目指す価値や理念を内外に伝えるため、機関紙「The YMCA」を定期刊行し、メールマガジン「ポジティブネット通信」も毎月配信しました。

6月に世界YMCAのカルロス・サンヴィー総主事とラズバン主事が来日した際には、そこで語られた「世界YMCA Vision2030」への想いや意義をウェブサイト等で発信し、その推進に務めました。

4年目となったウクライナ避難者支援活動については、2022年度以来の避難者アンケート調査報告書や動画をウェブサイト上に公開したところ、メディア等にも活用され、日本で暮らす避難者の現状と課題を広く社会に発信することができました。

ピンクシャツデーやウォーターセーフティーキャンペーンなど全国協働の取り組みについてもウェブ上に情報を集約・発信し、「連結ピン」としての働きを担ったほか、機関紙「The YMCA」1・2月号では、ピンクシャツデー10周年を記念して専門家による鼎談を実施。この運動の意義と可能性を発信しました。また東日本大震災15年／熊本地震10年の節目を迎えた3月には「The YMCA」で紙上座談会を行い、YMCAが目指すべき支援のあり方等について経験者の声を伝えました。

○機関紙「The YMCA」

毎月1日／年10回発行。発行部数10,000部

○日本YMCA同盟メールマガジン

「ポジティブネット通信」：毎月10日前後配信

○ホームページ、SNS：随時更新

○日本YMCAカレンダー制作

○世界YMCA / YWCA合同祈祷週 冊子制作



ポジティブネット創造

韓国YMCA全国連盟・韓国大学YMCA全国連盟主催 第2回アジア太平洋クリスチャン・ユース・ アッセンブリー（韓国・坡州）

アジア・太平洋地域のキリスト教団体で活動する17カ国・地域、90人のユースが8月19日～23日、韓国の坡州（パジュ）市に集い「第2回アジア太平洋クリスチャン・ユース・アッセンブリー」が開催されました。日本から4人のユース（都市YMCAスタッフ1人、学生YMCA1人、YWCAスタッフ2人）が参加しました。大会テーマは、「悔い改めと正義への回帰：AI・デジタル時代における気候危機と平和」。軍事境界線周辺の視察、豊かな自然の中でのエコロジーフィールドトリップ、「AIとどのように向き合うか」をテーマとした講演やディスカッション、ワークショップ等を通して、参加者一人ひとりが、急速にAIが普及する今日の世界の課題を学び、また各地で様々な社会課題解決に取り組むアジア・太平洋地域のクリスチャンユースとのつながりを深めました。

日中YMCA連絡委員会（日本・北九州）

10月8日～9日に北九州YMCAで、前日の「第188回全国YMCA総理事会」に引き続き「日中YMCA連絡委員会」が開催され、中華YMCA全国協会、上海YMCA、成都YMCA、西安YMCAより5人が来日しました。日本での開催は、2014年以来11年ぶり。2015年には南京で、2017年には光州で「日中韓平和フォーラム」の会期中に開催されましたが、コロナ禍もあり、パートナーYMCAの総主事も参加できない状況が続きました。また近年における政治的な日中関係の影響によりネガティブなイメージが先行したり、双方のYMCAの総主事や役員との交代もあり、交流が滞っていました。そのような背景を鑑み、今回の委員会は、日中YMCAの関係回復を進



アジア太平洋クリスチャン・ユース・アッセンブリー

めるためお互いを知ること、関係づくりの再スタートを主目的として行いました。中国からは限られた地域からの参加ではありましたが、今後の交流再開に向けて、活発な意見交換や交流が行われました。

アジア・太平洋YMCA同盟 運動強化委員会 (2026/1/26～27@フィリピン)

日本YMCA同盟は、アジア・太平洋YMCA同盟 (APAY) の「運動強化委員会」の委員として1月26日～27日、フィリピンのマカティYMCAで行われた対面の委員会に参加。APAYの支援を受けて運営しているYMCAや、ガバナンスやコンプライアンスに課題のあるYMCA、パートナー・サポート・グループ (PSG) の対象国であるカンボジア、ベトナム、東ティモール、モンゴルの各YMCAの運営状況や課題の共有、今後の支援計画について協議しました。またフィリピンYMCA同盟を訪問し、フィリピンYMCAの事業やスタッフ養成についても協議、意見交換を行いました。

世界YMCAチェンジエージェント

世界YMCAのユース育成プログラム「世界YMCAチェンジエージェント」第6期が2025年4月にスタートしました。日本から金魅貝さん（茨城YMCAユースリーダー）が選考に合格し、2026年7月まで、50カ国120人余のユースとともにオンラインを中心とした研修を受講中。グローバルな視点を持ちながら地域の課題を解決する力を身につけ、「世界YMCA Vision2030」の推進者としてリーダーシップを担っていくことが期待されています。



日中YMCA連絡委員会

学生YMCA

4月の「全国学生YMCA リユニオン2025」を皮切りに、2025年度の歩みが始まりました。社会のさまざまな現場で働く学生YMCAシニア同士や現役学生たちとの交流を通して学生YMCA体験の継承が行われたことは、一年間の学生YMCAプログラムにおいて力強い原動力となりました。世界における分断や暴力の連鎖の中「弱く小さくされた人々とともに生きたイエス・キリスト」に倣うあり方を、現代のユースの状況、文脈の中で学生YMCA活動としてどのように展開していくのか、日々問われた1年でした。

全国学生YMCA リユニオン2025

4月26日、東京YWCAを会場に開催されたリユニオンは、10代から80代まで85人が参加。「小さい私、弱いあなた～混沌の時代を生きる～」をテーマに学Y出身牧師による講演やパネルディスカッション等を通して「弱さ」の中に宿る真実の力こそが運動の源流であることを再確認しました。夏期ゼミへの期待とともに、次代へ希望をつなぐひと時となりました。

第51回全国学生YMCA夏期ゼミナール

9月12日～14日に東山荘で第51回全国学生YMCA夏期ゼミナールを開催し、シニアを含む48人が参加しました。「分断の世界の中で いま、あなたと出会う」のテーマのもと講師には、詩人でラッパーのFUNI氏、聖書研究講師には金迅野牧師をお招きしました。

FUNI氏によるラップワークショップでは、参加者が「心のど真ん中」のこぼれを安心して語れる場が生まれ、不安や喜びなど生きた感情をリズムに乗せて表現し、本格的なレコーディングの体験をしました。続く金牧師の聖書研究では、排外主義が増す社会の中で、この個人的な体験を聖書を通して捉え直す学びを与えられました。「自分を愛するように隣人を愛せよ」という聖書の言葉を軸に、他者との関係性の中で自分を知り、互いの「傷と傷を重ねあう」こと、他者の痛みを受け止め、応答することで分断を乗り越えられるとの言葉に力を与えられました。また、参加者が思い思いのテーマで発題をする自主ゼミナールでは都市YMCAのユースリーダー

の発題もあり、YMCAの多様な活動が共有されるなど、盛り上がりました。学生からは「自分を表現でき、他の人の自己開示も聞けて楽しかった」「分断はあらゆるところで起きているが、対話によって分断を乗り越える可能性を感じた」という声が聞かれました。ここで共有された「体験」が、見えない形で社会を変える希望につながることを感じる3日間でした。

第22回学生YMCA日韓交流プログラム

隔年で、日本と韓国の学生YMCAメンバーが交流する「学生YMCA日韓交流プログラム」が2月26日～3月1日の3泊4日、韓国ソウルで開催され、日本の学生14人と韓国の学生11人が参加。「AI時代における わたしの平和、世界の平和」をテーマに語り合いました。

学生たちはAI時代に感じている困難や不安を共有した他、学生街に出て街頭インタビューを実施。韓国の若者たちが抱える不安とSNSとの関連性についてAIを使って分析し、議論を深め、最終日には「第22回 日韓大学YMCA共同決議文」を作成。「より速くではなく、より安全に、より尊厳をもって、より共に生きるための原則をたて、連帯していく」といった10の原則を提案しました。ふりかえりの会では「じっくり語り合う中で言葉の壁を乗り越えられた」「AIについてここまで真剣に考えたのは初めて。周りに伝えていきたい」等の感想が述べられ、最終日には明け方まで語り合い、手書きの手紙を交換する姿が見られました。帰国後、参加学生の中から「これを機にもっと日韓関係について学んでみたい」という声が上がっており、事後学習会の準備が進められています。



日本YMCA研究所

全国YMCAオンライン研修プラットフォームは2年目を迎え、YMCAスタッフ2,250人が登録。スタッフとしての学びの機会を届けることができました。インターメディエイトコースの開設に加え、加盟YMCAでの活用推進のためのオンライン講座を開催しました。専門職管理者研修では高い専門性を持つスタッフを対象に、YMCA運動の担い手としての資質を高める研修を実施しました。日本YMCAスタッフ研修ステップIIの宿泊型フィールドトリップではアジア学院を訪問し、アジア・アフリカ地域から農作業をとおしてリーダーシップについて学んでいる研修生とともに3日間を共に過ごし、アジア学院が大切にしているサーバントリーダーシップについて学びました。日本YMCAスタッフ研修ステップIIIではステップIIを修了し、各YMCAのトップリーダーシップを担うスタッフを対象に高いレベルの学びの機会を提供することができました。

日本YMCA主事資格審査では、新たに8人が日本YMCA主事認証を受け、本制度が始まった1951年以降、総勢641人の主事を輩出しました。

研修

専門職管理者研修

日 程：7月21日～25日（4泊5日）

場 所：YMCA東山荘

研修生：9YMCAより19人

山野祥子（仙台）、高橋麻衣（仙台）、中林玲奈（仙台）、山本隆男（とちぎ）、森希実（とちぎ）、池長あゆみ（茨城）、田中達望（東京）、大竹薫子（東京）、藤田悠矢（東京）、後藤基子（横浜）、山田綾（横浜）、新倉夕子（横浜）、内田美智子（奈良）、田中千代（大阪）、入江拓郎（大阪）、森井稔輝（大阪）、伊藤典子（神戸）、小川みなみ（神戸）、岩下聡子（熊本）

主なカリキュラム：人間関係トレーニング、YMCAの福祉とブランディング、YMCAとキリスト教、福祉社会とYMCA、専門職としての人材管理と育成、横須賀フィールドトリップ



日本YMCAスタッフ研修ステップII

期 間：9月25日～11月28日（65日間）

場 所：YMCA東山荘／日本YMCA同盟／オンライン

研修生：7YMCAより11人

尾木善宣（仙台）、三好陽之（茨城）、沖津桃（東京）、杉田裕樹（東京）、茂澤いずほ（横浜）、棚橋泰菜（横浜）、林貴子（大阪）、越智絵美（大阪）、竹野寛美（大阪）、ゴールデフォーシュ・ミカエル（広島）、牛嶋加佐喜（熊本）

カリキュラム：

- | | |
|-------------------------|------|
| 1. YMCAの使命と証としてのキリスト教基盤 | 6講座 |
| 2. 社会・地域の課題への責任的な対応 | 14講座 |
| 3. 組織理解と運営能力 | 8講座 |
| 4. 自己・他者理解と自己啓発 | 2講座 |
| 5. その他（特別講義・他団体訪問） | 3講座 |

日本YMCAスタッフ研修ステップIII

期 間：2026年1月6日～10日（4泊5日）

場 所：YMCA東山荘

研修生：7YMCAより9人

太田聡（埼玉）、戸坂昇子（東京）、宮崎亮（横浜）、中川喬之（富山）、瀧中慎介（大阪）、菅田斉（大阪）、小林直樹（大阪）、山田浩介（神戸）、木村成寿（熊本）

カリキュラム：

- ・日本YMCAのブランディングとミッション
- ・非営利組織のマネジメント
 - ～トップリーダーに必要な経営の視点
- ・説教演習
- ・ソーシャルビジネスの視点からのYMCA事業運営について

主事資格審査

2025年6月1日付認証者・論文テーマ

伊藤信彦 (茨城YMCA)

茨城YMCAの将来像―創立30周年を迎えての総括と40周年に向けたヴィジョン―

鳩山徹郎 (東京YMCA)

YMCA山中湖センター 100年の歩みと今後の展望

大塚英彦 (横浜YMCA)

変化の激しい社会における、自己と社会の気づきと成長に関する考察

長田光玄 (横浜YMCA)

横浜YMCAの送迎サービスによる子ども会員増強

東田美保 (名古屋YMCA)

地域特性を活かした子の育ちを支えるプラットフォーム創造

中村彰利 (京都YMCA)

キャンプを通じた病児への支援とYMCA病児キャンプの展望

村上一志 (奈良YMCA)

YMCAアクアティックプログラムの指導カリキュラムの考察

上床敦 (大阪YMCA)

グローバル社会におけるYMCA英語教育事業の展望



2025年度全国YMCAオンライン研修プラットフォーム

加盟YMCAで課題となっている人材養成に関して、「研修制度の拡充及び採用機会の拡大タスク(担当総主事:大阪YMCA小川健一郎総主事、横浜YMCA佐竹博総主事)」を2023年10月に設置し、2024年2月の全国YMCA総主事会議での決議を経て、加盟YMCAのスタッフ育成の機会として2024年度に「全国YMCAオンライン研修プラットフォーム」を開設しました。開設2年目となった2025年度末の登録者数は2,250人で、開設当初から1,191人増加しています。インターミディエイトコースの開講の他、このプラットフォームを加盟YMCAや全国事業担当者会の研修等での活用が進むように、加盟YMCAの人事担当者や研修担当者を対象にWeb会議システムを使って研修を行いました。

【開設講座：ベーシックコース】

- YMCA理解 I (15講座)
- YMCAとキリスト教 (4講座)
- YMCA理解 II (2講座)
- 世界YMCA Vision2030 (8講座)
- YMCAブランド (3講座)
- 人権について (6講座)

【開設講座：インターミディエイトコース】

- YMCAとキリスト教 (4講座)
 - 日本YMCA基本原則をめぐって～聖書の視点から・聖書を読み解く・聖書のメッセージ・聖書のメッセージを語ること ― 続編
- YMCA指導者として ―ユースの理解と育成 (1講座)
 - YMCAにおけるユースエンパワメントを捉える視点
- YMCAマネジメント ― 経理・財務 (1講座)
 - YMCAマネジメント ― 経理・財務
- 自己のキャリア形成 (1講座)
 - 未来を描く ― YMCA職員としてのキャリアと自分らしい働き方

国際青少年センター YMCA東山荘

年間概要

創立110年を迎えたことを記念し、『YMCA東山荘110年の歩み』を編纂・発行しました。『東山荘100年の歩み』の続編として、2015年から10年間でふりかえるもので、多くの方のお支えによってコロナ禍やナラ枯れなどの困難を乗り越えてきた歩みを綴りました。

コロナ後は利用者数も順調に回復。2025年度は目標数には達しなかったものの年に29,301人の方にご利用いただきました。少子化の影響で、毎年ご利用くださっている学校の児童数が減少したことや、秋の連休に団体予約が集中したため受け入れられなかったこと等が、目標に至らなかった要因となりました。しかし利用希望の学校・団体は増えており、すでに次年度に向けて多数の予約をいただいています。

近隣地域との連携、自然体験の価値の訴求、SDGsに対応した施設改修についても順調に進めることができました。

御殿場市東山地区の観光協議会では10余年にわたって事務局を担い、その関係から「御殿場市東山青少年広場」の指定管理者も継続しています。また「御殿場・小山フードバンク」の事務局も続けており、地域の食品メーカーとの交渉なども行っています。

御殿場市国際交流協会が主催する、外国にルーツのある子どもたちの学習教室「ふじさん教室」の子どもたちに、今年度も東山荘の野外活動を提供しました。これは御殿場ワイズメンズクラブとロータリークラブの協力を得て開催している秋のチャリティゴルフ大会の益金を用いて実施しているもので、今年で3回目になりました。

「持続可能な地球」を目指す取り組みとして、再生可能エネルギーの利用を継続しました。また地域の避難場所として災害時の蓄電池を設置する計画については、御殿場市の理解・協力を得て、2026年度内には設置の予定となりました。



改修工事

2024年度の6号館リニューアルに続き、5号館の全面リニューアルを行いました。5号館は6人部屋20室と講師室を備え多くの学校や団体に愛用されてきた宿舎です。6号館とセットで利用される団体も多いため、昨年度の6号館リニューアル後は5号館の古さが目立つようになり、着工を急ぎました。

工事箇所は、屋根の防水、ドアの交換、断熱材の設置、水回り備品の交換、照明や空調の交換など全面におよび、外観も「御殿場市総合景観条例」に沿って木調に変えました。外壁の一部には、YMCAのブランドカラーをアクセントとして取り入れ、「みつかる。つながる。よくなっていく。」のスローガンとロゴもデザインしています。6号館とも調和し、「付近一帯の景色が新しくなった」「明るくて快適になった」と好評です。

ネイチャープログラム

今年度も多くの方たちにご参加いただきました。68の学校から延12,720人が富士山の自然を満喫したほか、東山荘の主催キャンプも8回実施し、420人が参加しました。

主催キャンプは富士山登頂をはじめ、自転車で自然の中を走るキャンプ、箱根外輪山まで歩き続けるキャンプなどを開催しました。大人や家族で参加できるプログラムもあり、のんびり富士山頂を目指すなど、それぞれに楽しまれていました。

温暖化の影響は富士山にも表れており、対策には苦心しました。幸いクマの出没はありませんでしたが、暑さのため10月以降もハチが活発に活動し続けた影響は大きく、その都度コースの下見や安全確認を行いました。想定を超える暑さへの対策も必須となり、変化に対応しながら参加者の安全を守り、自然の素晴らしさを感じていただけるように行っています。



寄附・支援

ポジティブネットYMCA国際協力募金

「子どもが、未来を創る。」をテーマに、全国のYMCAで募金活動を行いました。同盟は事務局としてポスターやリーフレット等を作成して、YMCAに連なる一人ひとりが変化の担い手として、考え、行動につなげられるよう働きかけました。寄せられた募金は世界の子どもや青年が、自分らしく過ごすための遊び、学び、社会の変革や平和を創る担い手として成長するためのプログラム等に用いられています。

(円)

収 入	
前年度繰越	4,880,069
2024年度国際協力募金	3,608,919
2025年度ツール分担金	273,405
収入合計	8,762,393
支 出	
青少年育成・貧困者支援 (カンボジア、モンゴル、東ティモール)	2,365,850
ユース育成(クリスチャン・ユースアッセンブリー参加費補助)	473,352
啓発・広報(リーフレット・ポスター制作)	1,219,284
事務費	262,565
支出合計	4,321,051
次期繰越	4,441,342

*上記は、日本YMCA同盟を通じた支援活動の収支報告です。

海外被災地・政変等支援(指定募金)

2023年10月7日以来、イスラエル軍によるパレスチナ・ガザ地区への激しい攻撃が続き、市民の避難所となっていたガザYMCAも爆撃されるなど、深刻な人道危機が広がっています。昨年に続き日本のYMCAは、パレスチナ緊急支援募金を全国に呼びかけ、緊急支援金を送りました。

また2022年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻も収束を迎えることなく、YMCAは2025年度も引き続き、避難者への人道支援を継続しました(詳細は8、9ページ)

(円)

収 入	
前年度繰越	37,494,382
指定募金	7,207,818
収入合計	44,702,200
支 出	
ウクライナ支援	11,534,711
パレスチナ支援	1,000,000
オリーブの木キャンペーン	398,000
ミャンマー支援	727,850
支出合計	13,660,561
次期繰越	31,041,639
ウクライナ支援	28,912,412
パレスチナ支援	484,238
トルコ・シリア支援	613,790
フィリピン支援	528,852
ミャンマー支援	502,347



2025年度募金ポスター



寄附・支援

能登半島地震／豪雨災害復興支援活動

2024年1月の地震と、同年9月の豪雨災害という「二重災害」により甚大な被害を受けた能登半島に、YMCAは2025年度も引き続き、子どもたちのリフレッシュキャンプを提供するなど、支援活動を継続しました。（詳細は10ページ）

(円)	
収 入	
前年度繰越	22,032,441
日本YMCA同盟受	3,783,527
収入合計	25,815,968
支 出	
フレンドシップキャンプ及びスキーキャンプ	7,428,796
支出合計	7,428,796
次期繰越	18,387,172

障がい児支援

全国のYMCAでは、障がいのある子どもたちのキャンプ、水泳、体操のほか、学習支援事業や放課後等デイサービスなど約400の特別支援プログラムを実施しており、3,400人余りが参加しています。

いずれのプログラムも参加者一人ひとりの特性に対応するため多数のボランティアを配置し、またそのボランティアの研修も行って、質の高い活動を提供しています。

これらの活動のため、今年度も多くの企業・団体が主旨に賛同くださり、ご寄附および物品の寄贈などさまざまな形で支援くださいました。特に、YMCAインターナショナル・チャリティランは全国20のYMCAで開催され、約1万1千人が参加。各地域の行政やメディアも後援くださり、益金17,593,740円を活動に充当することができました。



地震と内戦に苦しむミャンマーへ

2025年3月28日、マグニチュード7.7の大地震がミャンマーを襲い、3000人以上が犠牲になりました。以前から内戦が続く中で地震は、被害の全容も明らかにされず救援活動にも支障をきたすなど事態を悪化させ、深刻な人道危機をもたらしました。

現地のYMCAは建物の一部が損壊したものの、発災直後から食料や水など救援物資を配布して支援活動に奔走。日本のYMCAは30年以上前からミャンマー各地のYMCAと親交があったため、それぞれに連絡を取り合い、全国で活発な募金活動を展開しました。

4月30日にはオンラインによる報告会／祈祷会を開催。国内外から約100人が参加しました。祈祷会でミャンマー出身のマキンサンサンアウン牧師（大阪・高槻バプテスト

教会）は、「2020年のコロナ禍以降ミャンマーでは、2021年に軍事クーデターが起き、翌年には国軍が民家1200軒を焼き討ちした。2023年には食糧危機。2024年には洪水が起きた。そして今も軍事政権下で投獄されている人たちがいる」と、現地の惨状を語るとともに、「二度とミャンマーのような場所を作らないよう共に支えあいながら歩みたい」「私たちは“種”です。どんな苦境にさらされても、いつか芽が出る時が来る」と述べました。



ワイズメンズクラブ国際協会

国際的社会奉仕団体であるワイズメンズクラブはYMCAとともに歩みを続けています。東日本区・西日本区を合わせて122クラブ、約1,900人が各地域における社会課題に対して活動し、困難の時代にあっても、つながりを大切にしながら新しいクラブの創設や様々な工夫、チャレンジを続けています。

2025年度は、3期目となるワイズメンズクラブ国際協会東日本区と全国YMCAとの協働事業「Y's×SDGs Youth Action2026」実施に向けた準備期間として、YMCA・ワイズ内外から全国公募および選考が行われました。今期は選考委員を増員して広報に力を入れ、内部周知だけでなく外部の助成金情報サイトなどを活用した結果、YMCA内外から過去最多となる24チームが応募。地域の課題解決に向けたユニークな企画が集まり、プレゼンテーションを経て10チームが採用されました。2026年度には、各地域のワイズメンズクラブやYMCAで伴走支援をしていきます。

他にも学生YMCAの夏期ゼミなど、YMCAの重要なパートナーとして、子ども・ユースの研修や体験機会の創出、地域支援、ポジティブネット募金、全国YMCAの各イベントや研修会、そして紛争や震災などにより弱くされている方々への支援活動などに、多大なる協力をいただいています。

(円)

収入	
ワイズメンズクラブ国際協会 東日本区	400,000
ワイズメンズクラブ国際協会 西日本区	1,000,000
収入合計	1,400,000
支出	
第56回全国YMCAリーダー研修会	400,000
第51回学生YMCA夏期ゼミナール	500,000
第22回学生YMCA日韓交流プログラム	500,000
支出合計	1,400,000

日本宝くじ協会

一般財団法人日本宝くじ協会から助成を受け、集会用テントを37張、宿泊用テントを21張、合計58張が新たに全国の19YMCAに配備されました。地域の拠点となっている保育施設やランチでのイベント、スポーツ大会など、さまざまな場面で重宝され、21,000人以上の方が利用されました。不特定多数の方が参加する地域のイベントでも、宝くじ協会やYMCAのロゴが大きく入ったテントに、たくさんの方々が集う様子が見られ、ポジティブネットを拡げることとなりました。

(円)

収入	
助成金収入(本体事業費)	6,500,000
助成金収入(消費税分)	650,000
自己財源収入	1,275,450
収入合計	8,425,450
支出	
集会用テント 37張	5,459,500
宿泊用テント 21張	2,200,000
消費税	765,950
支出合計	8,425,450

YMCAユースファンド等

スヌーピーなどの作品を管理する「ピーナッツ財団」より助成を受け、経済的に困難な子どもたちのキャンプが行われたほか、ユース育成のための募金等から「ECGL」を支援しました。

(円)

収入	
前年度繰越(ピーナッツ財団助成金含む)	7,059,955
受取利息	13,036
寄付金収入	20,000
収入合計	7,092,991
支出	
経済的に困難な子どものキャンプ(茨城・東京YMCA)*	3,050,145
ECGL(English Camp for Global Leadership)	200,000
雑費	2,607
支出合計	3,252,752

次期繰越 **3,840,239**

*ピーナッツ財団(Peanuts Worldwide, LLC) 助成金事業

日本YMCA同盟委員会報告

委員任期：2024年7月～2026年6月 ◎は長を示します

1. 理事会・評議員会・常議員会・協議会

法人理事会

- ▼第381回 (2025年5月17日) (同盟) 対面形式会議
 - ・2024年度日本YMCA同盟事業報告の件
 - ・2024年度日本YMCA同盟決算報告の件
 - ・第36回同盟通常評議員会の議案・日程の件 他
- ▼第382回 (2025年9月27日) (同盟) 対面／オンライン(ハイブリッド) 会議
 - ・上半期事業報告および予算執行状況報告の件
 - ・次期総主事候補推薦委員会答申の件 他
- ▼第383回 (2026年1月24日) (同盟) 対面／オンライン(ハイブリッド) 会議
 - ・2026年度日本YMCA同盟方針・計画・骨子の件
 - ・2026年度日本YMCA同盟予算編成方針の件
 - ・2026年度会議年間スケジュールの件 他
- ▼第384回 (2026年3月7日) オンライン会議
 - ・2026年度日本YMCA同盟事業方針・計画の件
 - ・2026年度日本YMCA同盟予算案の件
 - ・次期理事候補選定の件
 - ・日本YMCA同盟負担金制度検討委員会からの答申の件 他
- ▼第385回 (2026年3月20日) (同盟) 対面形式会議
 - ・次期代表理事選定の件
 - ・日本YMCA同盟振興資金の件 他

理事 (7名)

仲井間健太、中道基夫、水田秀子、中村隆、
田口努(代表理事)、横山由利亜(執行理事)、
森田義彦(執行理事)

監事 (2名)

川本龍資、齋藤宙也

法人評議員会

- ▼第36回通常評議員会 (2025年6月21日) (YMCA東山荘) 対面形式会議
 - ・2024年度日本YMCA同盟事業報告の件
 - ・2024年度日本YMCA同盟決算報告の件 他
- ▼第37回臨時評議員会 (2026年3月20日) 対面形式会議
 - ・2026年度日本YMCA同盟事業方針・計画の件
 - ・2026年度日本YMCA同盟予算案の件

評議員 (12名)

◎ 山本俊正、上田晶平、奇恵英、利根川恵子、新林智子、
長谷川洋一、北條将人、山田拓路、山本知恵、吉岡路乃、
黄崇子、中田純子

同盟常議員会

- ▼第395回 (2025年5月17日) (同盟) 対面形式会議
 - ・2024年度日本YMCA同盟事業報告の件
 - ・2024年度日本YMCA同盟決算報告の件
 - ・第14回同盟協議会の件 他
- ▼第396回 (2025年6月21日) (東山荘) 対面形式会議
 - ・同盟代議員変更の件
 - ・その他
- ▼第397回 (2025年9月27日) (同盟) 対面／オンライン(ハイブリッド) 会議
 - ・上半期事業報告および予算執行状況報告の件
 - ・第14回同盟協議会委員会報告の件
 - ・日本YMCA同盟負担金報告の件
 - ・次期総主事候補推薦委員会答申の件 他
- ▼第398回 (2026年1月24日) (同盟) 対面／オンライン(ハイブリッド) 会議
 - ・2026年度日本YMCA同盟事業方針・計画骨子の件
 - ・2026年度日本YMCA同盟予算編成方針の件
 - ・総主事就任式の件 他
- ▼第399回 (2026年3月20日) (同盟) 対面形式会議
 - ・2026年度日本YMCA同盟事業方針・計画の件
 - ・2026年度日本YMCA同盟予算案の件
 - ・日本YMCA同盟負担金制度検討委員会からの答申の件
 - ・日本YMCA同盟振興資金の件
 - ・日本YMCA同盟次期役員候補推薦委員会の件 他

常議員 (22名)

◎ 山本俊正、仲井間健太、水田秀子、中道基夫、上田晶平、
奇恵英、利根川恵子、新林智子、長谷川洋一、平野昭宏、
廣瀬頼子、廣田康人、北條将人、村田堅太郎、山路はるか、
山田拓路、山本知恵、吉岡路乃、黄崇子、中村隆、中田純子、
田口努

同盟協議会

▼2025年6月21日～6月22日

場所：国際青少年センターYMCA東山荘 対面形式

協議会I

第1号議案 2024年度日本YMCA同盟事業報告の件／
2024年度決算報告の件

第2号議案 2025年度日本YMCA同盟事業方針・計画の件／2025年度予算の件

協議会II

■基調講演「世界のYMCAの今」

世界YMCA総主事 カルロス・サンヴィー氏

協議会III

■夕食懇親会

ウクライナ避難者支援報告

協議会IV

■「ブランディングプロジェクトから Vision2030へ」

協議会V

■「世界YMCA Vision2030」ワークショップ

「世界YMCA Vision2030」推進責任者 ラズバン・サス氏

協議会VI

■主事認定証授与式

聖日（派遣）礼拝

メッセージ：中道基夫牧師（日本YMCA同盟常議員）

奏楽：竹佐古真希氏（学生YMCAシニア）

代議員（137名）



2. 運営委員会

YMCA東山荘運営委員会

開催日：第1回（4月26日）YMCA東山荘

第2回（12月7日）YMCA東山荘

2024年度に改装した6号館の評価と、2025年度に続けて改装する5号館の改装計画について協議を行いました。実際に建物の状況を見て、修繕された点、修繕予定の備品などの確認をしたほか、5～6号館以外の館の改修に関しても協議するなど、将来を見据えた計画について話し合われました。収支状況に関しては、収入も支出も共に増加。今後については、首都圏の児童数減少による利用者数の減少が予測され、その対策を話し合いました。

その他、野外活動の現状や、地域活動の現状についても報告・共有し、東山荘の価値を高めるための策に関しても協議しました。

運営委員（6名）

◎村田堅太郎、野々垣健五、伊藤幾夫、田原績、佐藤恵子、小野実

退職金中央基金・職員年金基金運営委員会

開催日：5月28日、10月3日、2026年2月13日、3月12日

全国YMCAの退職金制度を維持し、退職職員への年金の安定的な供給のため資金の運用状況の確認、制度の課題などについて検討を行いました。また、2025年6月の全国総主事会議にて現状の課題など報告、説明を行いました。

委員（6名）

◎上田晶平、高田一彦、田中博之、山添仰、小幡忠弘、田口努

退職金中央基金・職員年金資金運用委員会（6名）

◎上田晶平、勝田正佳、久保田貞親、齋藤金義、田中博之、山添仰

日本YMCA同盟委員会報告

3. 常置委員会

学生部委員会

開催日：7月20日、2026年2月2日

7月には「第51回夏期ゼミナール」のテーマやプログラム編成について協議し、徐々に学生による運営体制に戻していくことを確認しました。2月の委員会では、「みらいの学Yプロジェクト」に沿った次年度の活動計画の他、課題を抱える学生YMCA寮の現状を把握し、学生部委員会としての対応について協議しました。

委員（6名）

◎仲井間健太、秋葉聡志、黄崇子、村瀬義史、新林智子、板野靖雄

国内協力委員会

開催日：9月22日、2026年1月19日、3月12日

社会教育団体として加盟YMCAの各地域における取り組みと、それを持続可能なものにするための法人運営の側面から意見交換を継続しています。とくに総主事やスタッフの不在のため運営が厳しいYMCAの状況を共有し、必要な支援の在り方を検討しています。振興資金について、山梨YMCA（施設拡充・緊急支援／20,000千円）、滋賀YMCA（緊急支援／10,000千円）へ新たに貸付を理事会に答申しました。

委員（7名）

小林正光、水田秀子、川本龍資、廣田康人、大久保知宏、中村隆、福山武志

国際協力委員会

世界YMCA同盟など関係諸国との連絡調整を図り、ウクライナ避難者支援、パレスチナ緊急支援、ミャンマー地震などの支援活動についての検討、およびYMCAポジティブネット国際協力募金の使途計画などについて協議検討しています。

委員（6人）

◎利根川恵子、山田拓路、伊藤容子、太田直宏、上村香野子、渡邊裕子

加盟退除・組織検討委員会

＊2025年度は開催なし

今年度は加盟YMCAからの会則変更等、委員会に諮る申請はありませんでした。引き続き、これからの時代に即した加盟の在り方等を検討の予定です。

委員（5名）

◎北條将人、笈川光郎、古田和彦、小川健一郎、中田純子

研究所委員会

開催日：6月13日

急激に変化する社会において求められるYMCAのスタッフ像を明らかにし、社会課題に適切に対応し、日本のYMCA運動をリードできる力を備えたスタッフの養成を目指して実施した研究所主催研修の2024年度報告および2025年度計画、2024年度より開設した全国YMCAオンラインプラットフォーム（E-ラーニング講座）の運営報告、2024年度主事認証者の承認を行いました。

委員（5名）

◎山本俊正、秋元みどり、秋葉聡志、星野太郎、杉村徹

4. 特別委員会

主事資格認定委員会

開催日：4月21日

日本YMCA主事資格の認定を行うための口頭試問と認定委員会を開催しました。

委員（5名）

◎秋葉聡志、山添仰、齊藤希世、佐竹博、鍛治田千文

主事論文審査委員（10名）

中村陽一、青山鉄兵、秋元みどり、村田堅太郎、河合将生、濱塚有史、上村香野子、久保田展史、加志勉、本田奈緒子

全国YMCA総主事会議関連報告

全国YMCA総主事会議

会 長：中村隆

副会長：佐竹博、中田純子

開催日：4月4日、6月20日～21日、10月7日～9日、

2026年2月4日～6日

総主事会議を牽引する役員会を中心に東日本、中日本、西日本地区の総主事会議とも連携する体制のもと、4月のオンラインでのキックオフ総主事会議に始まり、6月はYMCA東山荘、10月は北九州YMCA、2月には奈良YMCAで開催しました。今年度は茨城、埼玉、東京、神戸、熊本、福岡の6YMCAにおいて新たな総主事が就任し、情報交換や課題共有を積極的に進めました。また、YMCAトップリーダーシップとして必要な学びの機会として、10月にはコロナ禍を経て11年ぶりに開催する「日中YMCA連絡委員会」を兼ねて日中の歴史について学び、2月には発足から約3年となるこども家庭庁から講師を迎え、こどもを取り巻く社会状況と「こどもまんなか社会」の実現に向けた学びの機会を持ちました。オンラインを活用した全国協働の一環として、2024年度に開始した「全国YMCAオンライン研修プラットフォーム」の運用を継続し、多くの新たな研修コースを開講したほか、退職したスタッフや専門学校卒業生、ボランティアリーダーOBOGなどがYMCAからはなれてもつながり続けられる仕組みとして、「YMCAアルムナイコミュニティ」の運用を開始しました。また多様で個別具体的な総主事業務を相互にサポートし合うため、総主事経験者が定期的に各YMCAを訪問する取組みを開始し、鹿児島、広島、奈良、山梨を訪問サポートしました。

全国YMCA戦略会議

開催日：5月27日（対面）、9月16日、12月20日

5月には対面で、9月と12月にはオンラインで実施しました。事業規模の大きなYMCA（東京、横浜、神戸、大阪、広島、熊本）の総主事と総主事会議役員会で構成され、YMCAのもつさまざまな課題を捉え、進むべき方向性、対応策を見出し、総主事会議に向けて全国YMCAが一体となって課題に向けて取り組むために議論を重ねました。また目的にも掲げられている全国協働事業の推進のための取り組みや、総主事会議から諮問された事柄について協議されました。2025年度、戦略会議が中心となって進めたタスクは以下のとおりです。

・経営サポートタスク

・研修制度の拡充及び採用機会の拡大タスク

会長連絡会議

開催日：6月22日～23日（対面）、12月4日、2026年2月24日

事業間協働の推進のため各事業担当者会の会長が集う会長連絡会議は、開始から3年目を迎え、対面を含めた3回の会議の中で情報共有や協働に関する提案が積極的に行われました。本年度は新任会長が多く、お互いに会長連絡会議における多面的な意見交換から刺激を受け、事業担当者会の活発な運営につながりました。

全国担当者会

■子育て子育て事業部門

教育・保育担当者会

会長：宮崎亮 担当総主事：小澤昌甲

現在、全国75拠点で保育園・幼稚園・こども園などを運営しており、約6,200人の園児が在籍しています。2025年度も引き続き、一人ひとりに寄り添い、イエス・キリストの愛と奉仕の精神に基づく保育を実践しています。10月には保育士や教員を対象に、「いのちの力～自然の中で心で感じる保育」をテーマに、野外活動やキャンプのノウハウを活用した保育について学びました。1月に神戸YMCAで開催された管理職研修では、「半世紀にわたる里親運動の実践」をテーマとした橋本明氏の講演、「キリスト教保育の意義」をテーマとした関西学院短期大学小見のぞみ氏の講演を聞き、学びを深めました。

アフタースクール担当者会

会長：岡田ナスカ 担当総主事：濱塚有史

全国で102施設、日々約8,880人の子どもたちが通っています。それぞれの地域のニーズに合わせ形態は様々ですが、ひとりのこども、ひとつの家庭に伴走した保育が行われています。9月に行われたオンラインシェアミーティングでは、神戸市立六甲道児童館館長の金坂尚人氏を講師に迎え、日常のプログラムにすぐに活かすことができる「題名のないあそび」についてのワークショップを実施しました。1月に開催された

全国YMCA総主事会議関連報告

全国担当者会では、「子ども・若者の居場所を考える」をテーマに、早稲田大学教授の阿比留久美氏による基調講演を聞き、事業の枠を越えて、こどもや若者の居場所についての意見交換を実施。こどもたちとの関わりやこれからの取り組みのための学びを深めました。

発達支援担当者会

会長：熊本四季子 担当総主事：上村香野子

全国約80拠点で放課後等デイサービスや児童発達支援事業所など各種の発達支援事業を展開しており、約1,500人の子どもたちが在籍しています。11月に大阪YMCAで開催された全国担当者会には18YMCAから49人のスタッフが参加。大阪YMCAの取り組みを見学した他、大阪教育大学名誉教授の竹田契一氏や、YMCA学院高等学校校長の鍛治田千文氏より、ご自身の経験も踏まえたこれまでの障がい児支援の歩みを学びました。また、ピンクシャツデーの主管として、チラシやポスター、Tシャツなどのアイテムを製作しました。今年度は盛岡YMCAリーダーが作成した「子どもの人権カルタ」から「だいじだよ わたしのきもち ぼくのきもち」が標語に選ばれました。

■学校事業部門

専門学校担当者会

会長：望月温 担当総主事：加藤雄一

全国YMCA専門学校担当者会は、全国ネットワークを活かした協力体制の構築に注力しました。全国の大学が専門学校の領域である「実践教育」に踏み込んできている一方で、専門学校もまた学位相当の評価を得られるよう制度が変化しており、両者の境界が曖昧になっている中でYMCAの専門学校の独自性をどう打ち出すかが課題となっています。また、日本人学生の募集の伸び悩みや留学生の生活サポート、途中退学者対策など、細やかな支援が求められている現場の状況が全国共通の課題として共有されました。そのような中、YMCAの専門学校教育において、留学生の日本語教育から介護福祉等の専門教育へとつなげる質の高い人材養成モデルが高く評価されるなど、YMCAならではの強みを再確認するとともに、実習記録の効率化については、ICT導入を全国で情報共有しつつ進めたり、各校の実習先情報や留学生受け

入れ可否を共有する共通フォーマットを作成するなど、連携が可視化される動きも進められています。

日本語教育担当者会

会長：尾道一幸 担当総主事：福山武志

2024年に施行された「日本語教育機関認定法」に伴う新制度への移行に向けて申請が本格化する中、全国で協働した一年でした。各YMCAではカリキュラムの再編や財務諸表の整理、理事会との情報共有といった煩雑な申請業務が負担となっており、ノウハウの共有が急務となっています。また、登録日本語教員の国家資格取得についてなど現場レベルでの取り組みも必至の状況となり、これまでオンラインで行っていたカリキュラム検討会を2026年度から対面で実施することが2025年度役員会で承認されました。全国の主任教員のネットワークを深化させるとともに、各Yの日本語教育の質の向上並びに認定突破への具体的方策にむけて着実に歩を進めています。また、今年度は日台YMCA日本留学ワークショップが開催されたり、長期留学の申請数がコロナ禍前の水準まで回復したことなど全国ネットワークを活かした質の高い教育環境の維持・発展に向けた前向きな一歩を踏み出すことができました。

■高齢者事業担当者会

会長：益聡 担当総主事：塩澤達俊

全国約40拠点で展開している高齢者事業所や介護予防、QOL向上のための各種プログラムの運営状況を踏まえ、2025年度も役員会を中心にそれぞれの課題を共有し、スタッフの技術向上や学び、交流を目指して研修会を開催しました。11月には、前年度一部開設された全国YMCAオンライン研修プラットフォームを活用した法定研修講座を、全国の協力のもと全科目録画作成し、本格始動させました。また、10月には社会福祉法人賛育会にて、赤ちゃんポスト等の地域福祉の実践を学ぶスタッフ研修会を対面で実施しました。研修では「業務しゃべり場」を通じた現場スタッフ同士の交流も行われ、業種の枠を超えた絆を構築しました。今後もネットワークを活かし、「YMCA的ケア」の向上を目指すことが話し合われました。

■ ウェルネス担当者会

会長：鳩山徹郎 担当総主事：上地信親

ウェルネス事業は、アクアティック、ジмнаスティック、サッカー、野外、野外施設、バスケットボールの事業部で構成され、全国27YMCAにおよそ30,000人の会員が在籍しています。10月に大阪YMCA主管で行われた「第56回全国YMCAリーダー研修会」は、「Set Sail ～心に帆を揚げて～」をテーマに、全国から90人が参加しました。“ウェルビーイング”をキーワードに、私たちの幸せとは？ 幸せな社会とは？ そのためには何ができるだろう？ 全国の仲間と一緒に考え、それぞれのウェルビーイングへ向かって“帆を揚げて”いく。そんな出航準備の会となりました。11月に開催された全国担当者研修会では、「YMCAの強み、本質の捉えなおし」をテーマに据え、文教大学人間科学部准教授の青山鉄兵氏を講師に招き、「YMCAの青少年／ウェルネス事業の強みを考える視点」と題した基調講演をもとに、YMCA再興のヒントから研修後の具体的なアクションまで検討、意見交換しました。全国YMCA ウェルネス指導者資格の運用推進にも力を入れ、2025年度には新たに100件以上の資格が認定されました。

■ マネジメント部門

総務担当者会

会長：杉村徹 担当総主事：山添仰

労務から法務、財務まで幅広く扱う総務担当者会は今期も役員会、全国担当者会ともに活発に展開されました。第1回担当者会は7月14日オンラインにて開催。経費精算に係る業務効率化について外部講師を招き、勤怠管理の効率化についてもYMCAの事例を学びました。第2回担当者会は10月29日～31日横浜YMCAで実施。多様な働き方についてのこれからは外部講師から受講し、生成AIの導入について実践を通して学びました。また横浜YMCAの多様な取り組みについても学ぶ機会となりました。2月17日にオンラインで行われた担当者会では社労士から次年度以降の労働法規関係の改正について学びました。役員会も担当者会の方向性等の検討で全8回行いました。

公益協働事業担当者会

会長：箕浦史郎 担当総主事：加志勉

公益協働事業担当者会は、主に行政や共通するミッションをもつ民間企業、NPO 法人などとの協働のなかで活動場面を広げていく事業を展開している担当者会です。今年度は2回の担当者会を行いました。1回目はオンラインで7月24日に行いました。公益協働事業のガイドラインについてをテーマとして取り上げ、理解を深める機会となりました。2回目は2月26日～27日にかけて神戸YMCAを会場に全国から担当者が集い、今期新たに指定管理事業をスタートさせたYMCAの取組を学び、また公益協働事業として地域に寄り添うとはどういうことか、について皆で考える機会となりました。また、神戸YMCAが運営している「明石こども広場」を訪問し、現場の方から直接お話をうかがうなど貴重な機会を創りました。

ICT担当者会

会長：村上祐介 担当総主事：村上祐介

過年度より開発を進めてきた、会員管理・プログラム予約・決済等の機能を持ったオリジナルシステム「Y-Link」の開発及び展開を中心に行いました。今年度は開発元である熊本YMCAに加え、限定的な展開であるものの、ぐんまYMCA・滋賀YMCAが導入し、運用が開始されました。7月28日には全国YMCA向けにY-Link情報共有会をオンラインで実施し、18YMCA55人が参加し、導入事例と具体的な導入に向けたプロセスを示しました。また9月18日～19日には6年ぶりとなる対面担当者会を滋賀県で実施し、9YMCA13人が参加。Y-Link導入に向けたセッションやAI活用事例共有のほか、滋賀YMCA設立に関わるヴォーリズについての学びを深めました。普段共有しづらいICT担当者同士の課題共有を対面で行うことができ、顔の見える関係づくりの重要性に改めて気づくことができました。

■ 英語・国際事業部門

英語教育担当者会

会長：青柳真理子 担当総主事：星野太郎

国際事業担当者会

担当総主事：星野太郎

英語教育担当者会は、7月14日～15日（会場：名古屋YMCA、13人参加）と12月2日（オンライン開催、21人参加）

全国YMCA総主事会議関連報告

の年2回開催されました。近年、各地で多くの参加者を集めている海外交流プログラム（海外サマーキャンプ）の実施報告を聞き、今後の展望について話し合ったほか、効果的な広報戦略に関する協議等を行いました。

12月4日には全国から約20人の講師がオンラインで集まり、YMCA English Teacher's Meeting が開催されました。特別支援教育士・社会福祉士である埼玉YMCA総主事の太田聡さんを講師に招き、「英語クラスで特別な支援や行動面の課題がある子どもへの対応」と題した英語による講演をうかがい、サポートが必要な子どもたちへの指導に関する学びを深めました。

年末12月26日～28日には全国の中高生を対象にした恒例のECGL (English Camp for Global Leadership) が東山荘で行われました（主管：東京YMCA、埼玉YMCA）。16人の参加者は、グループプレゼンテーションや個人スピーチ等の水準の高い課題に、皆笑顔で、全力を尽くして取り組んでいました。

国際事業担当者会は、1月29日にオンラインで開催され、32人の国際事業担当スタッフが参加しました。コロナ禍の影響から回復し、多くのYMCAで再開された国際協力事業や国際交流活動の内容を共有したほか、国際事業を通じた平和教育に関する学びの時間も持ちました。またグループディスカッションを通して、日本のYMCAの国際事業の今後の方向性や活性化の方案を共に考え、意見を交換しました。

■ピンクシャツデー

学校におけるいじめの認知件数が過去最多の73万人となる中、YMCAは今年も2月第4水曜日後にピンクシャツデーを開催。ピンクの服や小物でいじめ反対をアピールしたほか、各地で勉強会などが行われました。

今年はYMCAがピンクシャツデーに取り組み初めて10年目となったことから、機関紙「The YMCA」3月号では記念の座談会を実施。西野博之さん（認定NPO法人フリースペースたまりば理事長）、吉富多美さん（児童文学作家）と田口努（日本YMCA同盟総主事）がそれぞれの専門をもとに、子どもをいじめから守るために何をすべきかを考えるとともに、今後のピンクシャツデーの役割と期待について語り合いました。

全国YMCAもそれぞれの地域で、学校や企業、行政との協働を発展させ、運動の輪を広げており、北海道YMCAとつな

がりのある和菓子店はピンクシャツデー限定のお饅頭を販売（写真）。大阪の梅花教会は「ピンクシャツデー礼拝」を行うなど、ユニークな取り組みもみられました。

文科省によれば、いじめの件数は増えているものの重大事態の増加率は減るなど、早期発見・早期対応には一定の効果があると報告されています。YMCAは引き続き「いじめストップ」の風潮を広め、子どもたちを被害者にも加害者にもしないよう取り組んでいきます。



■ウォーターセーフティーキャンペーン

「ウォーターセーフティーキャンペーン」は、全国YMCAアクアティック事業部会が中心となり、例年6～9月の期間で実施しています。生命はすべてに優先するかけがえのない大切な贈物です。このかけがえのない生命を守り育てることが目的です。2025年度はウォーターセーフティーキャンペーンの動画を製作した他、ハンドブックの配布（約11万5千部）、水難事故から身を守るための着衣泳講習会（約19,000人参加）、AEDを用いた一次救命処置講習会などの安全講習会や指導者養成（約1万人参加）など、地域の学校などと協働してさまざまなプログラムを展開しました。これからも、「自分のいのちを守り、みんなのいのちを大切に」する取り組みを全国YMCAで推進していきます。

現勢(全国・世界)

(2026年3月末現在)

組織

世界の国・地域	120
国内	
都市YMCA(加盟・準加盟)	34(同盟含む)
・公益財団法人	19
・一般財団法人	7
・学校法人	14
・社会福祉法人	12
・NPO法人	6
・営利法人	4
・任意団体	1
学生YMCA	35
・学生YMCA寮	10
・サークルYMCA・YWCA	13
・休会中・設立準備中・その他	12
うち公益財団法人	3
一般財団法人	1
全国の活動拠点(センター、幼保園、学校、宿泊施設、高齢者施設等、指定管理含む)	302

メンバー

世界で運動に関わる人の数	6,500万人
国内の年間登録者の数	72,916人

ボランティア

総会構成員	4,626人
ポリシーボランティア	1,928人
ユースボランティア	1,941人
認証ユースボランティア	累計19,100人

※ユースボランティアとは：野外・ウエルネス・障がい児プログラム・国際などの分野で子どもたちに寄り添い、成長を支えるボランティアです。

加盟団体

- ・世界YMCA同盟
- ・アジア・太平洋YMCA同盟
- ・世界学生キリスト教連盟
- ・日本キリスト教協議会(NCC)

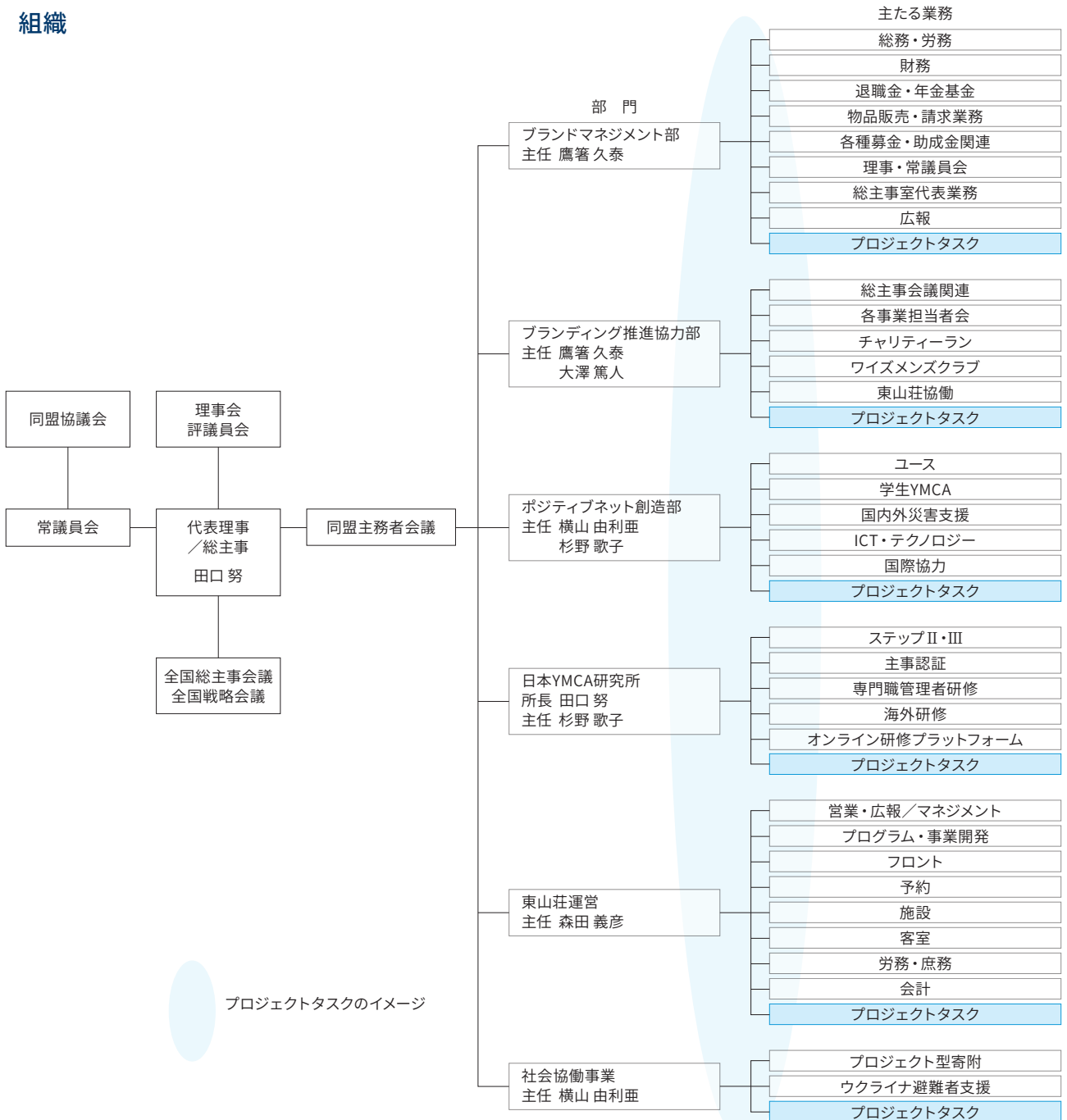
関係・友好諸団体

- ・一般社団法人 ワイズメンズクラブ国際協会東日本区
- ・ワイズメンズクラブ国際協会西日本区
- ・公益財団法人 日本YWCA
- ・公益財団法人 日本レクリエーション協会
- ・公益社団法人 日本キャンプ協会
- ・公益財団法人 ボーイスカウト日本連盟
- ・公益社団法人 ガールスカウト日本連盟
- ・公益財団法人 日本クリスチャン・アカデミー
- ・公益社団法人 日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)
- ・認定NPO法人 開発教育協会(DEAR)
- ・認定NPO法人 日本NPOセンター
- ・認定NPO法人 国際協力NGOセンター(JANIC)
- ・認定NPO法人 全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)
- ・一般社団法人 協力隊を育てる会
- ・社会福祉法人 全国社会福祉協議会
- ・「広がれボランティアの輪」連絡会議
- ・NPO法人 自然体験活動推進協議会(CONE)
- ・教育協力NGOネットワーク(JNNE)

2025年度日本YMCA同盟 組織・職員

(2026年3月末現在)

組織



職員

	主務者	職員	嘱託・パート	インターン
四谷	田口努 横山由利亜 鷹箸久泰 大澤篤人*	山下達也 高田京子* 伊藤路乃 福田奈里子	友廣高也 田附和久 山田紀久美 小野すみさき リー晴美 山佐亜津子*** 石橋英樹 竹中弥芳	松永幸樹 金田和大 岡野高芽 吉岡優
東山荘	森田義彦 杉野歌子	沼田光隆 横山明子 盛岡美貴 白鳥裕之 滝口敦子 遠藤舞 小林加奈 芹澤多賀子 山田仁 阪田祥章 杉山菜津美	藤澤幸伸 芹澤正 杉山翔 加藤由香里 須藤礼奈 前田琢磨 海老岡莉子 杉山伊偉 鈴木苑佳 川口充雄 横田久代 石田敏之 伊東三恵子 土屋直恵 朝倉重浩 杉山真彦 佐藤孝次 和田優子 志賀麻里 月村山彦 慶田博美	

* 出向 **派遣 ***大阪YMCA兼務出向

2026年度日本YMCA同盟 事業方針・計画

日本YMCA同盟 2026年度年間基本聖句

隣人を自分のように愛しなさい。

マタイによる福音書22章39節（新共同訳）

世界中で戦争や紛争など対立が激化し、民主的な世界が試練にさらされています。日本においても孤立や格差が深まり、他者への敵視や憎悪が増幅しています。分断や格差、排他的な風潮は、社会のつながりをむしばみ、最も弱い立場にある人びとの希望を奪っています。

頼るべき絆を失い孤独に悩む子どもたち、経済的困難に直面するひとり親家庭、そして戦火や災害を逃れた避難者や、私たちの暮らしを支えながらも「境界線」の外側に置かれがちな外国籍の方々などが深刻な影響をうけています。また急速なデジタル化やAIの普及は便利さをもたらす一方、人間をデータとして扱い、人の尊厳を希薄化させるリスクも孕んでいます。このような時代の中で、YMCAの土台となる「隣人を自分のように愛しなさい。」という聖句を実践し、血縁や地縁を越え、一人の人間の尊厳を等しく守り抜くことを目指していききたいと思います。

さらに、誰もが自分らしく、他者や自然と調和して生きられる「ポジティブネットのある豊かな社会」を目指していきます。希望は、孤立しては抱けず、人びとが共有し語り合うことで初めて「現実」となり得ます。ひとりが「よくなる」と、その笑顔に出会った誰かがうれしくなり、また次のひとりが「よくなる」。人の善意や前向きな気持ちの連鎖こそが、社会の歪みを修復し、平和を形にする確かな原動力となります。いじめ、貧困、環境破壊、そして分断。目の前にあるこれらの歪みを一つひとつ修復していく私たちの歩みは、小さな種まきのようなかもしれませんが、各地で確実に芽吹き、希望を形にしていくと信じています。

2026年度も世界のYMCAと共に「世界YMCA Vision2030」を推進し、自分たちの心の中にある見えない壁を取り払い、意見や立場の違いを尊重し、対話を通じてつながりを見出すこと。一人ひとりが自分自身と、社会と、そして地球環境と調和して生きられる世界を目指します。また、全国の加盟YMCAの活動を根底から支える努力をすすめ、分断に抗い、希望を分かち合い、目の前の一人と誠実に向き合うその一歩が、世界をよりよく変えていくよう歩み続けていきます。

事業方針・計画

事業方針 I. 世界YMCA Vision2030の推進

日本YMCAの代表機能として、加盟YMCAの事業や活動を世界YMCA Vision2030と結びつけ、世界に広がるグローバルネットワークの一つとして展開することをサポートする。また、日本YMCA同盟の事業を世界YMCA Vision2030の運動を広げる4つの柱に沿って推進する。この2つの役割から、世界YMCA Vision2030を加盟YMCAと共に推進する。

I-1 加盟YMCAの「世界YMCA Vision2030」推進をサポートする

- ① 世界YMCAから発信されるVision2030の状況や、推進に必要な情報を加盟YMCAに共有する。
- ② 世界とつながりながら「世界YMCA Vision2030」を推進できるように、世界YMCAの動きとあわせた研修機会を設ける。
- ③ 「世界YMCA Vision2030」の4つの柱に沿った加盟YMCAの事業や活動を国内外に発信する。
- ④ 若者のメンタルヘルス、気候変動危機、平和を願う活動、インクルーシブな社会のための活動など、顕在化する社会課題に対して、YMCAと目的を同じくするワイズメンズクラブ国際協会を筆頭に、企業、行政、NGO/NPO等をパートナー団体として加盟YMCAとつなぐ。
- ⑤ 急速に進む少子高齢化への対応、子どもの人権が守られ主体的に生きる力を育む取り組み、介護予防プログラム等、地域で“子育て・子育て”から高齢期まで寄り添い伴走する加盟YMCAの働きをサポートする。（コミュニティー ウェルビーイング）
- ⑥ 社会に閉塞感を持つ若い世代のメンタルヘルスに注視し、夢を持ち、自己実現のために参画できる機会を加盟YMCAと共に創出する。（やりがいのある仕事と雇用環境の創造）
- ⑦ 気候変動への取り組みを専門とするNGOや企業と協働し、気温の上昇や豪雨・豪雪による災害の増加等、日常生活にも影響を及ぼしている気候変動の危機に対するアクションを加盟YMCAと共に進める。（持続可能な地球のために）
- ⑧ 国内外のYMCAと協働してユース世代の交流を促進し、公正な世界を創るために貢献できる地球市民の育成に努める（公正な社会の実現のために）
- ⑨ 使命を果たしていくためのツールとしてAIを活用できるように、国内外におけるYMCAでのAI活用事例の共有、スキル向上のための機会を提供する。（Y-AI）

2026年度日本YMCA同盟 事業方針・計画

I-2 「世界YMCA Vision2030」の運動を広げる
4つの柱に沿って同盟の事業を推進する1 コミュニティー ウェルビーイング
Community Wellbeing

YMCAは、すべての人が、個人と集団のウェルビーイングを大切にしながら、精神、知性、身体のパランスのとれた成長ができることを目指す。2030年までに世界中の若者とコミュニティに向けて、高品質で適切かつ持続可能な健康とウェルビーイングへの方策を共創し、提供・提唱する。

- ① 企業や行政等と共に社会課題を解決するプロジェクト型寄附を、社会協働事業としてさらに深める。社会から共感・支持を受ける「寄附を受ける団体」としてのYMCAの姿を強める。加盟YMCAの取り組みにつなげ、各地で相乗効果を促進する。
- ② 5年目となるウクライナ避難者への支援を、多様な人びとのコミュニティウェルビーイングを目指す働きとして、YMCAの総合力を活かして継続する。また、本活動を一つのケースとして、日本で暮らす”海外につながる人びと”が生きやすい多文化共生社会の実現のために、加盟YMCAと共に努める。
- ③ 自然災害や感染症の流行、社会変化に起因するアクシデント等、その種類や発生時の被害、影響が多様化している状況を鑑み、災害時や緊急時にも一人ひとりが尊重されるよう、加盟YMCAや関係団体とのコミュニケーションを日常的に図り、緊急時の初動がスムーズに行えるように備える。

2 やりがいのある仕事と雇用環境の創造
Meaningful Work

YMCAは、すべての若者が学び、価値のある有意義な仕事に従事し、持続可能な生活を築く権利を持っていると信じている。経済状況が変化していく中でも、価値のある、公正かつ公平な教育、トレーニング、雇用、起業の機会を創出し、拡大し、提唱していくことを目指す。

- ① 中高生やユース世代、若い社会人らが社会課題解決のために活動や起業ができるようWhy Base.の運営をはじめ、支援する。このことを通して、現代の若者の関心事やニーズを聴き取り、次世代が担うYMCAの姿を示していく。
- ② 都市YMCAで活動するユースボランティアや学生YMCAのメンバーが、所属を超えて活躍できる機会を提供する。メンバーシップバイデザインの観点より、YMCA活動の担い手から、生涯を通してYMCA運動の支援者・協力者としてつながるよう関係を深める。
- ③ 加盟YMCAのスタッフが職制を問わず、YMCAの働き人として自己研鑽を行えるよう「全国YMCAオンライン研修プラットフォーム」を継続する。加盟YMCAや事業担当者会での運用を促進する。
- ④ 創設2年目を迎える「YMCAアルムナイコミュニティ」を継続し、YMCAの働きから離れたあともYMCAとゆるやかにつながる機会を提供する。YMCAの外での経験を持って再びYMCAで働きたいという希望者や、YMCA経験のある人材を求めている全国YMCAに対して有益な雇用機会につなげる。

3 持続可能な地球のために
Sustainable Planet

YMCAは、私たち一人ひとりが地球環境の保護と再生のために行動し、人類が自然と調和して生きることのできる世界へ転換すべきであるとする。気候変動に対する若者の積極的な行動と、彼らの主導による持続可能な解決策の活動を推進し、より良い環境を目指す運動体となることを約束する。

- ① 地球温暖化、災害の多様化・多発化など、身近な生活に影響を与えている気候変動に対し、YMCAや個人がその歯止めとなる行動変容につながる学びの機会や情報提供を行う。
- ② 全国のYMCAが環境に配慮した施設となるために、自然エネルギーの活用によるパワーシフトが進むためのサポート・協力をする。
- ③ 環境に配慮した素材を使用してノベルティーやユニフォームを製作する。YMCA東山荘では自然エネルギーの活用や蓄電池の配備、井戸水の活用、プラスチック製アメニティ利用の削減、リサイクル製品の利用に努める。これらの取り組みを全国の加盟YMCAと共有し、日本のYMCAが共に持続可能な地球のために貢献していく意識を高め、行動する。

4 公正な世界の実現のために
Just World

YMCAは、正義、平和、公平を求め、すべての人の人権を守ろうと努める若者とコミュニティの力を信じる。組織的な差別、不公平、不正など、あらゆる差別との闘いにおいてグローバルな発言者となり、すべての人の声が確実に届くよう、活動する若者とコミュニティの声を大きくしていく。

- ① YMCAピンクシャツデー、YMCAウォーターセーフティーキャンペーン等、人びとの人権、いのちを守るための啓発活動を進める。
- ② ウクライナへの軍事侵攻、パレスチナ問題、ミャンマー情勢等、紛争や社会情勢により困難にある人びとに寄り添い、国内外のYMCAや関係諸団体と協力し、平和の実現に努める。
- ③ 企業や助成財団等と協働し、困窮家庭、居場所を求める若者たち、差別や偏見にさらされる子どもたち、テクノロジーから孤立するシニアらのために多様な体験・経験を加盟YMCAと共に提供する。

事業方針 II. 継続して全国のYMCA運動の連結ピンとしての同盟機能の維持に努める

国内外のYMCAをつなぎ、人と人、人と組織、組織と組織、そして社会とを有効につなぎ、結びつける「連結ピン」の役割を担う。また、構築された関係、コミュニケーションを円滑にする「潤滑油」となり各地域におけるYMCA運動が効果的に推進するよう加盟YMCAに伴走していく。

- ① 世界YMCA、アジア・太平洋YMCA同盟に連帯し、世界最大の青少年団体としてのYMCAのグローバルブランドの価値を高める。加盟YMCAのグローバルな交流の強化や事業化につながる情報共有、協働を進める。
- ② 2014年から始まったYMCAのブランディングを振り返り、評価を行う。それを踏まえて「YMCAブランディング2.0」に向けて、まずは事例やエピソードなどを集め、わかち合いや共有の時を持つ。
- ③ 加盟YMCAの事業推進と健全運営のため、全国YMCA総主事会議、事業担当者会や喫緊の課題に対応する各タスクチームの事務局機能を務め、困難な状況にあるYMCAや、総主事不在・スタッフレスのYMCAへの伴走支援を行う。
- ④ 加盟YMCAが共通して行っている、障がい児支援（チャリティーラン等）やいじめ反対運動（ピンクシャツデー）の取り組みにおいて連絡・調整や、また新たな手段や企画を用いた発信を通して、より社会への訴求効果を高める。
- ⑤ 学生YMCA運動の推進のため、各学生YMCAにおける活動や組織運営に必要な支援業務を継続的に実施する。また、大学におけるキリスト者や、全国学生YMCA賛助会に代表されるOB/OGら学生YMCAを支える層との関係構築を拡大・強化する取り組みを進める。
- ⑥ 加盟YMCAの人材育成の機関として日本YMCA研究所の充実した運営を目指す。3年目となる全国YMCAオンライン研修プラットフォームは、加盟YMCAや事業担当者会での利用促進を図る。時になかった講座や教材の拡充、YMCAスタッフのためのストレスマネジメントにも取り組む。
- ⑦ 行政・政府機関（内閣府、文部科学省、こども家庭庁等）や賛同企業との関係を深め、加盟YMCAの事業強化に有益な取組みや情報を共有するとともに、新たな誘致を積極的に行い、プロジェクト型寄附や他団体との協働につなげる。
- ⑧ ワイズメンズクラブ国際協会における区の担当主事をはじめ、中央青少年団体連絡協議会、広がれボランティアの輪連絡会議、キャンプ5団体連絡会議等の各青少年団体、NGO・NPO、キリスト教関係諸団体との関係を深める中で連帯と協働を進め、研修会等の有益な情報を全国のYMCAに共有する。
- ⑨ 国内外で発生する災害や紛争に対する人道支援活動において、加盟YMCAが速やかに支援活動を開始できるよう初動の調査や情報収集を行う。また、その支援や募金活動において連絡・調整及び情報発信の役割を担う（対策本部機能）。
- ⑩ 加盟YMCAスタッフが安心して働くことのできる環境とQOL向上のため、退職金中央基金・職員年金基金の安定化を図るべく、将来の方向性についての検討を行う。

事業方針 III. 同盟事務局とYMCA東山荘の安定的な運営を目指す

日本YMCA同盟は2028年に結成125周年を迎える。世界YMCA Vision2030のゴール実現に向けた進捗フェーズに即した事務局体制を整えるため、より安定的な運営・経営環境を構築していく。YMCA東山荘は、上述のゴールに向けた国際青少年センターの戦略的な将来計画、資金計画の立案を行う。

- ① 日本全国のYMCA運動に寄与する同盟事務局がその機能を充実させ、加盟YMCAとの人事交流や、次世代スタッフの採用及び研修に努める。
- ② 新たな負担金制度を導入するにあたり同盟事務局の機能・機構について現状を整理し（棚卸し）、国内・国際情勢やテクノロジーといった多角的な側面から、今の時代に即した在り方を検討していく。
- ③ 111年目を迎えるYMCA東山荘は少子化に伴う利用者減少傾向に対して新たな利用者層を開拓し、安定した運営を目指す。また近隣地域との連携を強化し、自然体験の価値訴求、SDGsに対応した施設の改修計画を立案しグローバルな人材養成を行う国際青少年センターとして活動する。

全国YMCA一覽

都市YMCA

北海道YMCA (011) 561-5217	札幌市中央区南11条西11丁目2-5
盛岡YMCA (019) 658-8773	盛岡市中央通3丁目19-22
仙台YMCA (022) 222-7533	仙台市青葉区立町9-7
ぐんまYMCA (027) 234-2299	前橋市国領町1-4-1
とちぎYMCA (028) 661-7451	宇都宮市陽東4-18-30
茨城YMCA (029) 886-6005	つくば市東新井24-7
千葉YMCA (043) 222-6973	千葉市中央区富士見2-5-15 塚本第三ビル7F
埼玉YMCA (04) 2939-5051	所沢市小手指町1-39-2
東京YMCA (03) 6302-1960	新宿区西早稲田2-3-18 日本キリスト教会館6F
在日本韓国YMCA (03) 3233-0611	千代田区神田猿楽町2-5-5
横浜YMCA (045) 662-3721	横浜市中区常盤町1-7
山梨YMCA (055) 235-8543	甲府市中央3-10-7
静岡YMCA (0557) 81-3986	熱海市上宿町19-22 熱海郵便局私書箱31号
富山YMCA (076) 425-9001	富山市堤町通り1-3-14
金沢YMCA	金沢市泉3-10-16-4 朝倉方
名古屋YMCA (052) 757-3331	名古屋市千種区春岡1丁目2-7
三重YMCA (059) 331-8011	四日市市阿倉川町3-17
滋賀YMCA (0748) 33-2420	近江八幡市鷹飼町537-3
京都YMCA (075) 231-4388	京都市中京区三条通柳馬場東入中之町2
奈良YMCA (0742) 45-5920	奈良市西大寺国見町2-14-1
大阪YMCA (06) 6441-0894	大阪市西区土佐堀1-5-6
和歌山YMCA (073) 473-3338	和歌山市太田1丁目12番13号
神戸YMCA (078) 241-7201	神戸市中央区加納町2-7-11
姫路YMCA (079) 277-1872	揖保郡太子町原白毛山921
YMCAせとうち (086) 223-1509	岡山市北区中山下1-5-25
広島YMCA (082) 228-2266	広島市中区八丁堀7-11
松山YMCA	松山市清水町4丁目75-3-201 砥綿方
北九州YMCA (093) 531-5750	北九州市小倉北区鍛冶町2-3-9

福岡YMCA

(092) 831-1771 福岡市城南区七隈1-1-10

長崎YMCA

(095) 822-5987 長崎市恵美須町4番7号 YMCAビル1階

熊本YMCA

(096) 353-6397 熊本市中央区段山本町4-1

鹿児島YMCA

(099) 296-7901 鹿児島市真砂町34-6 吉永ビル209号
*2026年4月より移転 鹿児島市中山町2-16-16

沖縄YMCA

(098) 832-6817 那覇市壺屋2-17-3

学生YMCA寮

北海道大学YMCA汝羊寮

(011) 736-9918 札幌市北区北12条西2丁目1-20

东北大学YMCA涿水寮

(022) 249-3564 仙台市太白区大罫町8-1

東京大学YMCA寮

(03) 3816-1029 文京区向丘1-20-6

一橋大学YMCA一橋寮

(042) 849-8108 国立市東1-20-12

早稲田大学YMCA信愛学舎

(03) 3203-2858 新宿区西早稲田2-5-2

京都大学YMCA地塩寮

(075) 751-9744 京都市左京区吉田牛ノ宮町21

京都府立医科大学YMCA橘井寮

(075) 771-6913 京都市左京区吉田牛ノ宮町22

九州大学YMCA一麦寮

(092) 707-6464 福岡市西区元浜1-30-3

長崎大学YMCA浦山寮

(095) 846-9241 長崎市上銭座町3-13

熊本大学YMCA花陵会

(096) 343-1432 熊本市中央区黒髪2-27-21

学生YMCA

●大学内サークル学生YMCA

北海道・東北地区

尚絅学院大学YMCA、宮城学院女子大学YWCA

関東地区

慶應義塾大学YMCA、国際基督教大学YMCA、
清泉女子大学YMCA、中央大学YMCA、
フェリス女学院大学YMCA、立教大学YMCA

関西地区

大阪YMCA国際専門学校YMCA、
関西学院大学YMCA（上ヶ原・聖和・三田キャンパス）、
神戸女学院大学YMCA

九州地区

活水女子大学YWCA、九州ルーテル学院大学YMCA

●休会中・設立準備中・その他

弘前大学YMCA、弘前学院大学YWCA、
山梨英和大学YMCA、同志社大学SCA、
同志社女子大学YWCA、大阪大学YMCA、
神戸大学YMCA、岡山大学YMCA、広島大学YMCA、
鳥取大学YMCA、西南学院大学YMCA、
福岡女学院大学YWCA

2025年度事業報告書

Annual Report 2025

2026年6月1日発行

発行 公益財団法人 日本YMCA同盟

〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号

Tel 03-5367-6640 E-mail info@japanymca.org

制作 pros creative



みつかる。つながる。よくなっていく。